

満洲文字の文字表をめぐって(12)

—音価(2)：母音—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

吉池：今回は、満洲文字の文字表に、どの時代の音価を付すべきかということを検討しました。

中村：満洲文字の文字表は、過去に書かれた有圈点満文を読むためのものだから、有圈点満文が作られたとされる1632年、すなわち17世紀前半を想定して、その当時の音を付するのが理想だということでした。

吉池：もっとも、17世紀前半の満洲文字の音を検討する資料としては、満文中の漢語借用語の表記などの対音資料に限られます。このような対音資料は、満文の音を体系的に知り得るものとは言い難い。また、17世紀前半の資料を検討する準備は、今のわれわれには無いので、今後の課題としようということでした。

中村：今、われわれにできることは、百年後の資料ではあるが、満文の音を体系的に知ることができる18世紀前半の『満漢字清文啓蒙』(1730年題)を主なる資料として、その上で現代やその他の過去の資料を参考にし、検討するということでした。

吉池：そこで、手もとにある三つの現代の文献と、『満漢字清文啓蒙』(1730年題)等の過去の文献が示す音が、どのようなものであるかを確認しました。

中村：今回は、確認した文献を利用して、母音の検討を行うということでした。

三つの文献の母音

吉池：三つの現代の文献、すなわち服部四郎(1937)「一資料」<sup>1</sup>、池上二郎(1955)「トゥングース語」<sup>2</sup>、河内良弘(1996)『文語文典』<sup>3</sup>を並べると表1のとおりです。なお、河内良弘(1996)『文語文典』は、満洲文字に「基本音」「変異音」「文語音」の三種の音を付し

<sup>1</sup> 服部四郎(1937)「満洲語音韻史の爲めの一資料」『音聲の研究』第6輯、279-294頁。『服部四郎論文集第一巻 アルタイ諸言語の研究 I』三省堂、1986年、68-86頁、所収。

<sup>2</sup> 池上二郎(1955)「トゥングース語」市川三喜・服部四郎(編)『世界言語概説』下巻、東京：研究社462頁-464頁に掲載された文字表の音価。昭和61年(1986)第12版による。

<sup>3</sup> 河内良弘(1996)『満洲語文語文典』京都大学学術出版会。助編者は清瀬義三郎則府、愛新覚羅 烏拉熙春 両氏。

ますが、「基本音」と「文語音」を挙げます。音声であることを示す [] が付された「基本音」は現代方言の口語によるものようです。音声の簡略表記と見ても良いし、音韻と見ても良い。他方の音韻であることを示す//が付された「文語音」は、過去の満洲語音を示すものようで、//が付されてはいますが音声と見ても良いものです。最後に挙げた暫定案はわれわれの案です。検討をとおして改訂します。

表1. 諸文献の満洲文字の音：母音

母音字	翻字	服部(1937)	池上(1955)	河内(1996)		暫定案
				口語	文語	
ᡳ	a	a	[a]	[a]	/a/	[a]
ᡳ	e	ə	[ə]	[ɤ]	/e/	[ə]
ᡳ	i	i	[i]	[i]	/i/	[i]
ᡳ	o	ò	[o]	[ɔ]	/o/	[o]
ᡳ	u	u	[u]	[u]	/u/	[u]
ᡳ	ū	ò, u*	[o, u]	[u]	/u/	[u]

\*服部(1937)はūの読音について、母音単独の場合 [ò] とするが、子音+ūの場合、[ò] と [u] が出るので、ò, uとした。

中村：河内良弘(1996)『文語文典』の文語の/u/は、どのような音でしょう。

吉池：注記はありませんが、国際音声学会(2003)<sup>4</sup>によると [u] は中舌の円唇母音です。中舌の円唇母音を意図していると想定して良いのでしょうか。

中村：/u/は措くとして、表1をみる限り、満文 a, e, i, u の音には問題はなさそうです。問題があるとしたら、満文 o と ū の音です。o と ū を同音とするのは、服部四郎(1937)「一資料」と池上二郎(1955)「トゥングース語」です。『満漢字清文啓蒙』(1730年題)でどのようなになっているか確認したいですね。

吉池：『満漢字清文啓蒙』の第一字頭(単母音、子音+母音)の部分をまとめると次のとおりです。単母音は6、子音+母音は125、合計131あります。125の子音+母音のすべてを挙げて検討する紙幅は無いので一部を出します。なお [] で提示する漢字音は『漢語方音字彙(第二版)』<sup>5</sup>の現代北京語音です。有気音は [ʰ] ではなく [h] で表記し、『漢語方音字彙

<sup>4</sup> 国際音声学会編、竹林 滋・神山孝夫訳(2003)『国際音声記号ガイドブック』東京：大修館書店。17-18頁参照。

<sup>5</sup> 北京大学中国語文学系言語学教研室編(1989)『漢語方音字彙(第二版)』北京：文字改革出版社。

(第二版)』に当該の漢字が無いばあい、『新華字典〔1979年修訂重排本〕』<sup>6</sup>のピンインの音形を『漢語方音字彙』の音声表記の方式に合わせて付すことにします。左端に服部四郎(1937)「一資料」を参考として出しました。

表2. 『滿漢字清文啓蒙』第一字頭

服部四郎 『滿漢字清文啓蒙』の第一字頭

(1937)	滿文	音注	滿文の単語とその漢語訳
[ɑ]	a	阿昂[aŋ]呀[ia]切	ama 父親。
[ə]	e	惡[ɣ]	eme 母親。
[i]	i	衣[i]	ice 初一。又新。又染。
[ò]	o	窩[uo]	oke 嬌子。此 o 字在聯字内俱念傲。单用仍念窩。
[u]	u	屋[u]	ufa 麵。又末子。
[ò]	ū	窩[uo]	ūren 塑像。此ū字在聯字内俱念傲。单用仍念窩。
[na]	na	那囊[naŋ]呀[ia]切 <sup>7</sup>	nari 母熊。ganara 取去。tana 東珠。
[nə]	ne	諾能[nəŋ]哦[ɣ]切	nere 鍋坑子。三支鍋。又令披着。genehe 去了。 inemene 索性。左右是左右。
[ni]	ni	呢[ni]	nicuhe 珍珠。funima 糞生的蠅虫。mekeni 口琴。
[nò]	no	挪奴[nu]窩[uo]切	nomin 青金石。又魚白。sonombi 擱屁股。bono 雹子。
[nu]	nu	奴濃[nuŋ]屋[u]切	nure 黄酒。becunuhe 打架拌嘴了。inu 是。又亦字。
[nò]	nū	挪奴[nu]窩[uo]切	・・・ナシ・・・
[qɑ]	ka	喀康[kʰaŋ]呀[ia]切	kaki 衣服窄狹。又酒暴氣。gakaraha 裂開了。 jaka 東西物件。又縫子。
[çɑ]	ga	噶剛[kaŋ]呀[ia]切	gala 手。
[ha]	ha	哈夯[xaŋ]呀[ia]切	hala 姓。hargašambi 仰望。bahana 挑杆子。aga 雨。 aha 奴才。
[qò]	ko	顆空[kʰuŋ]窩[uo]切	koki 蝦蟇蝌子。kokoli 瞞頭套的衣服。coko 鷄。
[çò]	go	郭[kuo]	gobi 淤沙。沙漠。
[hò]	ho	豁[xuo]	horoki 老蒼。forgošoho 吊轉了。tohoma 鞞 <sup>8</sup> 。 doho 石灰。
[qù]	kū	枯[kʰu]	kūca 未馴的公羊。akūha 沒了。死了。sacikū 鋤頭。
[çu]	gū	孤[ku]	gūsa 旗下。
[hu]	hū	呼[xu]	hūya 螺螄。又螺甸杯 agūra 傢伙。又器械。

<sup>6</sup> 『新華字典〔1979年修訂重排本〕』北京：商務印書館、1981年。

<sup>7</sup> 囊は、囊囊 [naŋ] の誤記もしくは俗字か。『康熙字典』（中華書局1980年による）に見えない。

<sup>8</sup> 鞞は『康熙字典』（中華書局1980年による）に「〔集韻〕鞞鞞馬被具」とある。

			uhūkū 挖樞刀子。dahū 皮囤子。
[ḃa]	ba	八 [pa]	basa 手工。ubašaha 反了。又翻轉。hūhūba 無開岐袍子。
[ḃə]	be	撥 [po]	beri 弓。jebele 撒袋。kicebe 勤謹人。
[ḃi]	bi	逼 [pi]	bira 河。dobihi 狐狸皮。sabi 祥兆祥瑞。
[ḃò]	bo	撥 [po]	bocihe 醜。obokū 洗臉盆。hobo 棺材。
[ḃu]	bu	不 [pu]	buleku 鏡子。sabuha 看見了。sabu 鞋。
[ḃù]	bū	撥 [po]	・・・ナシ・・・
[pà]	pa	叭潘 [pʰan] 窪 [ua] 切	page 牌骨瓦。kaparaha 壓匾了。sampa 蝦米。
[pə]	pe	坡 [pʰo]	pelerjembī 馬嘴飄揚。heperekebi 老胡塗了。又亂醉如泥了。又一槩摟取。erpe 繭唇
[pì]	pi	批 [pʰi]	pilehe 批判了。nempilehe 封條封了。nepi 鋤刀床子。
[pò]	po	坡 [pʰo]	polori 大籩籬。porponohobi 粗胖。
[pù]	pu	鋪 [pʰu]	puseli 鋪子。šumpulu 手鬆無力。umpu 小裡紅菓。
[pù]	pū	坡 [pʰo]	・・・ナシ・・・

……………以下省略……………

中村：満文 a に付された阿の現代北京語の音には、『漢語方音字彙（第二版）』によると、文語音 [ʌ] と白話音 [a] の 2 音があります。『滿漢字清文啓蒙』の当時も、おそらく同様でしょう。阿に付された反切の昂呀切は、昂 [aŋ] + 呀 [ia] です。阿の音が白話音 [a] であることを示しているようです。

吉池：そのようですね。今後は阿昂呀切のように反切が付されている場合、反切にのみに音を付して、阿昂 [aŋ] 呀 [ia] 切のようにします。

中村：表 2 では、be 撥 [po]、bo 撥 [po]、bū 撥 [po] のように、e, o, ū の区別なく撥が当てられます。また、pe 坡 [pʰo]、po 坡 [pʰo]、pū 坡 [pʰo] でも、e, o, ū の区別なく坡が当てられます。o と ū は良いとして、なぜ e まで同一の漢字を当てるのか、ということについて確認しておきましょう。

現代北京語には満文の be や pe に最適の [pʌ] や [pʰʌ]（もしくは [pə] や [pʰə]）の音はありません。『滿漢字清文啓蒙』の当時の北京語音も同様であったため、近似音の撥 [po] や坡 [pʰo] を利用して、be や pe を表記せざるをえなかったということでしょう。

### 文字 ū の 2 つの音

吉池：服部一郎 (1937) 「一資料」はさきに見たように単独の母音字 ū には [ò] を付します。しかし、子音字 + 母音字 ū を見ると、[ò] と [u] の二種があります。

中村：その点について、『滿漢字清文啓蒙』（1730年題）の子音字+母音字 *ū* についてどのようなか確認しましょう。

吉池：第一字頭の *ū* に付される漢字音と単語は次のとおりです。

漢字音	単語
<i>ū</i> 窩 [uo],	<i>ūren</i> 塑像。
<i>nū</i> 挪奴 [nu] 窩 [uo] 切,	無し
<i>kū</i> 枯 [kù],	<i>kūca</i> 未駟的公羊。 <i>akūha</i> 沒了。死了。 <i>sacikū</i> 鏃頭。 <i>uhūkū</i> 挖掘刀子。 <i>dahū</i> 皮圍子。
<i>gū</i> 孤 [ku],	<i>gūsa</i> 旗下。
<i>hū</i> 呼 [xu],	<i>hūya</i> 螺螄。又螺甸杯 <i>agūra</i> 傢伙。又器械。
<i>bū</i> 撥 [po],	無し
<i>pū</i> 坡 [p <sup>h</sup> o],	無し
<i>sū</i> 梭 [suo],	無し
<i>tū</i> 都 [tu],	<i>tūku</i> 打糕的榔頭。又連櫓。
<i>lū</i> 囉龍 [luŋ] 窩 [uo] 切,	無し
<i>mū</i> 摸 [mo],	無し
<i>cū</i> 綽 [tʂ <sup>h</sup> uo],	無し
<i>jū</i> 拙 [tʂuo],	無し
<i>yū</i> 啣雍 [iuŋ] 窩 [uo] 切,	無し
<i>rū</i> 啣龍 [luŋ] 窩 [uo] 切滾舌念,	無し
<i>fū</i> 佛風 [fəŋ] 窩 [uo] 切,	無し

中村：概略として、*kū* 枯 [k<sup>h</sup>u]、*gū* 孤 [ku]、*hū* 呼 [xu] の音が [u] で、それ以外 (*tū* は除く) の音は [o] (近似音として窩 [uo]) が付されています。この *kū*, *gū*, *hū* は、いわゆる男性子音字の  $\text{ᠬ}$ ,  $\text{ᠭ}$ ,  $\text{ᠬ}$  です。

#### 子音+*ū* に単語の例がないことについて

中村：ところで、*ū* 窩 (*ūren* 塑像) と *tū* 都 (*tūku* 打糕的榔頭。又連櫓。) の二例以外は、母音字 *ū* を含む見出し字の下には単語が挙がりません。これをどのように見ますか。

吉池：有圈点満文の *ū* は、男性子音字の  $\text{ᠬ}$  k[q],  $\text{ᠭ}$  g[ç],  $\text{ᠬ}$  h[h] に後続する用法が主なもので、それ以外は借用語の表記に僅かに使用されるだけとされます。そういったことの反映なのでしょう。

中村： $\text{ᠬ}$  k[q],  $\text{ᠭ}$  g[ç],  $\text{ᠬ}$  h[h] に後続する用法以外は、借用語とみられる僅かな例しか

いとなると、『満漢字清文啓蒙』（1730年題）が、第一字頭の子音+ūのすべてに、子音+oと同音であるかのように漢字音で注記するのは僅かなūの単語の例によるのでしょね。

吉池：そうですね。単独の満文ūにはūren 塑像という単語が挙がっています。満文の教授者は、この単語により、実感をもって満文ūの音を教えることができたはずですが。学習者の中には、満文の読み書きはできなくとも、満洲語はある程度できる者はいたでしょう。そのような学習者もある程度実感をもって満文ūの音を習うことができたかもしれません。初めて満洲語文語を学習する漢人は習い覚えるしかなかった。

中村：玉聞氏の語彙を集めた文献に山本謙吾(1969)『基礎語彙集』<sup>9</sup>があります。一々の口語には相当する文語が付されていたはずですが、ūを含む文語に相当する単語は、どのくらい出てくるのでしょうか。

吉池：山本謙吾(1969)『基礎語彙集』は、3061の口語の単語を収め、対応する文語形も付します。その文語形によると、gū, kū, hūを除き、ūを有する単語はbutūnの1例のみです。しかも、butūnは、名詞butu [butw]（入るところはあっても出るところのないもの）の形容詞形として「butūn (?) [butun]」として挙がっており、疑問符が付されています。

中村：そうすると、服部四郎(1937)「一資料」において、玉聞氏が子音+ūのūを[o]と発音するのは、教え込まれた満文の読音であり、玉聞氏にとっては架空の音であったと言ってもよさそうです。

吉池：もっとも、ūren 塑像のūに関わることですが、池上二郎(1946)「ūの表す母音」<sup>10</sup>によると、『大清全書』（1683年）、『満漢同文全書』（1690年）、『満漢類書』（1700年）、『同文廣彙全書』（1702年）に、ūlen（家）ūren（像）について、olen, orenまたはeolen, eorenという文語形がみられるとのこと（以上207頁趣意）。ūをoと同音とすることを見て取ることができます。これは、『清文啓蒙』のūとoを同音とする表記と相通するものです。

中村：文字o [o]と文字ū [o]の[o]が、どの程度に開いた母音であったか、即ち[o]～[o]のいずれであったかは不明ですが、しばらくの間は、文字o（及びū）については表1「諸文献の満洲文字の音：母音」の右端に書き付けたわれわれの暫定案のo[o]のままとし、ū[u]については[o, u]に訂正する、ということではいかがでしょう。[o, u]とするのは池上

<sup>9</sup> 山本謙吾(1969)『満洲語口語基礎語彙集』東京：アジア・アフリカ言語文化研究所。

<sup>10</sup> 池上二郎(1946)「満洲語の若干の文語形中のūの表す母音に就いて」Tōyōgo Kenkyū Sōkangō, 18-24頁。『満洲語研究』東京：汲古書院、206-212頁による。

二郎(1955)「トゥングース語」と同様です。

吉池：とりあえずということでしたら特段の異論はありません。

中村：ところで、『満漢字清文啓蒙』の見出しの文字 o (及び ū) に付された注記「此 o 字在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」は何を意味するのでしょうか。

#### 『満漢字清文啓蒙』の文字 o 及び ū の付記について

吉池：見出しの文字 o (及び ū) に対する漢字の注記として窩[uo]があり、その下に文字 o (及び ū) で始まる単語があります。さらにその下に「此 o 字在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」という付記があります。窩[uo]は、見出しの文字 o (及び ū) の音を漢語音で注記したのですが、その下に付された漢語の付記「此 o 字在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」が何を意味するか、その意図を理解するのは難しいですね。

#### 付記 1

「o 窩[uo] oke 嬪子。此 o 字在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」

付記の訳：この o は、聯字内ですべて傲と発音する。単用の場合(仍：依然として、しばしば)窩と発音する。

「ū 窩[uo] ūren 塑像。此ū字在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」

付記の訳：この ū は、聯字内ですべて傲と発音する。単用の場合(仍：依然として、しばしば)窩と発音する。

中村：この付記を文章としてどのように読むかという問題と、傲と窩の音をどのように理解するかという二つの問題があります。先ず文章としてどのように読むかを検討しましょう。

「聯字」と「単用」ですが、この用語は何を指すのでしょうか。

#### 聯字と単用

吉池：池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」に次のようにあります。

「本書【清文啓蒙：対談者注記】における単字、聯字の用語の意義は、前者は一音節を表す単音文字ないし単音文字の結合したものであり、後者は多音節を表す単音文字の結合である。」(64頁)<sup>11</sup>。

---

<sup>11</sup> ここで言う「一音節を表す単音文字ないし単音文字の結合したもの」は意味を取りにくいですが、「一音節を表す」は「単音文字」と「単音文字の結合したもの」の両者に係るものであろう。そうであるならば、「単音文字」は母音のこと、「単音文字の結合したもの」は子音+母音のこととなる。

この記述はおそらく、次に挙げる、『満漢字清文啓蒙』（1730年題）第一字頭の最後の一文に依ったものでしょう。

「右第一字頭。共四十七句。一百三十一字。聯字清話二百六十九句。卷内所註漢字槩從滿洲語音。專爲習說清話時。無蛮音之誤也。」

（右第一字頭、共に四十七句、一百三十一字。聯字の満洲語（清話）は二百六十九句。巻内の漢字で注記した所は満洲語音に従う。もっぱら満州語（清話）を習い話す時に蛮音の誤り（なまった発音）をなくすためのものである。）

中村：それぞれの数字は何を指すのでしょうか。

吉池：『満漢字清文啓蒙』の第一字頭の見出しの満文や其の下の単語を数えてみました。それによると、ここで言う「四十七句」は47種の字母、「一百三十一字」は第一字頭に収められている131の見出しの満文音節です。a, e, i, o, ū, na, ne, ni, no, nū……等の数となります。47種の字母を使って131の見出しの音節を書いている。池上氏はこの131の見出しの満文音節を単字と見るのでしょうか。「聯字清話二百六十九句」は、それぞれの見出しの満文音節の下にある269の満文（清話）の単語の数となります。

中村：「聯字」は満文の単語だということはわかります。「単字」という用語は出てきませんが、131字の見出しの満文音節とみて良いかどうかは一考を要するでしょう。

### 単字と単用について

吉池：「単用」はよく用いられる用語ですが、「単字」の用例は少ない。第十字頭（V+o）に「oo 窩幽切」という見出しの音節があり、それに対する付記として「此 oo 字。在聯字單字内俱念傲」（文字 oo は、聯字と單字においてともに、傲と発音する）とあります。

中村：「単字」を、「聯字」と同じ範疇の名詞として用いているので、見出しの131字の「字」を「単字」と見てよいのでしょうか。少なくとも「単用」を「字」を表す名詞と見るのは困難です。

吉池：「単用」が何であるか明示されていませんが、“単字を単独で用いる”ことであろうと思います。そのように理解して良いならば、実質的には単字と同様となります。そうすると、「此 o 字在聯字内俱念傲。單用仍念窩。」は“此の o 字は、単語内ですべて傲と発音する。単字 o を単独で用いる場合（仍：依然として、又は、しばしば）窩と発音する。”となります。

中村：「聯字内」（単語内）の「内」をどのように理解するか難しいところですね。

### 「聯字内」の「内」の読み

吉池：「聯字内」の「内」について、語頭、語中、語末のすべての位置の○を指すのか、それとも、特定の位置を指すのかという問題ですね。

「oke 嬪子。此○字在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」のように、○で始まる単語「oke 嬪子」の下に付記があることから見て、この付記の意味するところは“聯字（単語）のokeの○を傲と発音する。単用すなわち単字○を単独で用いる場合（仍：依然として、又は、しばしば）窩と発音する”ということになりそうです。少なくとも語中に限定した表現ではないようです。

また、第四字頭（V+n）に「此 sin 字。在聯字中間下邊俱念身。在聯字首。念身心俱可。単用仍念心。」とあります。これにより、「聯字首」は語頭の音節、「聯字中間」は語中の音節、「在聯字下邊」は語末の音節と見ることができます。そうすると「聯字内」は、位置を問わず“単語において”と理解するのが穏当でしょう。

中村：付記の後半部分「単用仍念窩」の「仍」を、吉池さんは“依然として”又は“しばしば”としますが、これをどちらで読むかによって、文意がだいぶ異なります。「仍」は“依然として、元のまま”と読む場合が多いような気がします。

### 付記の「仍」の読み

吉池：手もとにある辞典類で確認しましょう。『辞海』<sup>12</sup>によると「①還、依然。②依照。③重複；頻繁。…以下略す」とあります。『全訳 漢辞海 第四版』<sup>13</sup>によると「①頻繁に。かさねて。しばしば。しきりに。②依然として。従来のまま。…以下略す」とあります。『新華辞典』によると「仍然，依然，還，照旧」とあります。『辞海』と『漢辞海』は「頻繁に」「依然として」とし、『新華辞典』は「依然として」とします。

中村：「依然として、元のまま」と読むならば、「此○字在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」は“此の○字は、単語において全て「傲」と発音するけれども、単用すなわち単字○を単独で用いる場合元のまま「窩」と発音する”となります。「窩」は問題の無い音ということになります。

他方「頻繁に、しばしば」と読むならば、この付記は“此の○字は、単語において全て「傲」と発音する。単用すなわち単字○を単独で用いる場合しばしば「窩」と発音される”となり、「窩」は不都合な問題の有る音となりそうです。

---

<sup>12</sup> 『辞海 語詞分冊（上）』上海：上海辞書出版社、1979年第2次印刷による。

<sup>13</sup> 『全訳 漢辞海 第四版』戸川芳郎監修 佐藤進・濱口富士雄編、東京：三省堂、2017年第1刷による。

吉池：「仍」をどのように読むか、類似の付記を見てみましょう。

#### 付記 2

第三字頭 (V+r) sir 「此 sir 字。在聯字首。念詩[ʃ] 尔西[ei] 尔俱可。単用仍念西[ei] 尔。」

第六字頭 (V+k) sik 「此 sik 字。在聯字首。念詩[ʃ] 珂西[ei] 珂俱可。単用仍念西[ei] 珂。」

第七字頭 (V+s) sis 「此 sis 字。在聯字首。念詩[ʃ] 思西[ei] 思俱可。単用仍念西[ei] 思。」

第八字頭 (V+t) sit 「此 sit 字。在聯字首。念詩[ʃ] 忒西[ei] 忒俱可。単用仍念西[ei] 忒。」

第九字頭 (V+b) sib 「此 sib 字。在聯字首。念詩[ʃ] 鋪西[ei] 鋪俱可。単用仍念西[ei] 鋪。」

第十一字頭 (V+l) sil 「此 sil 字。在聯字首。念詩[ʃ] 擻西[ei] 擻俱可。単用仍念西[ei] 擻。」

第十二字頭 (V+m) sim 「此 sim 字。在聯字首。念詩[ʃ] 模西[ei] 模俱可。単用仍念西[ei] 模。」

#### 付記 3

第四字頭 (V+n) sin 「此 sin 字。在聯字中間下邊俱念身[ʃən]。在聯字首。念身[ʃən] 心[cin] 俱可。単用仍念心[cin]。」

第五字頭 (V+ng) sing 「此 sing 字。在聯字中間下邊俱念生[ʃəŋ]。在聯字首。念生[ʃəŋ] 星[ciŋ] 俱可。単用仍念星[ciŋ]。」

単字すなわち見出しの si- に付された漢字音

第一字頭 si 西[ei]

第二字頭 sii 西[ei] 衣切

第十字頭 sio 羞[ciou]

中村：付記 2 は “si- は、語頭で詩[ʃ]- と西[ei]- と発音することができるけれども、単用では（仍：依然として、しばしば）西[ei]- と発音する” となる。“依然として” と読むか “しばしば” と読むかということですが、三つ目に挙げた「単字すなわち見出しの si- に付された漢字音」は、西[ei] 羞[ciou] であり、このことから見ると、音[ei-] を基本となる音として良いのでしょうか。そうであるならば、付記 2 の「仍」は “依然として、元のまま” と読むこととなります。付記 3 も同様に解釈して “si- は語中で[ʃ-] と発音し、語頭で [ʃ-] と西[ei-] と発音することができる。単用の場合は元のまま[ei-] と発音する。” とすると自然な読みになりそうです。

吉池：そうであるとする、先の付記 1 の「仍」も “依然として、元のまま” と読み、「此 o 字在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」を “文字 o は、単語において全て「傲」と発音する。単用すなわち単字 o を単独で用いる場合は元のまま「窩」と発音する” と読むこととなります。これは、「窩」と発音してはいけないという注意ではなく、単語においては「傲」と発音し単用においては「窩」と発音するというように、文字 o に二つの音があることを示して

いることとなります。

中村：次の問題は「傲」と「窩」がどのような音を意図したものかということです。池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」はどのように理解しているのでしょうか。

### 池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」の付記に対する理解

吉池：池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」は、まず「聯字内俱念～。単用仍念～」の例を列挙します。

第一字頭 (V)	o 窩	此 o 字在聯字内俱念傲[au]。単用仍念窩[uo]。
	ū 窩	此 ū 字在聯字内俱念傲[au]。単用仍念窩[uo]。
第二字頭 (V+i)	oi 威	此 oi 字。在聯字内俱念惡[ɤ]意切。単用仍念威[uei]。
第三字頭 (V+r)	or 窩尔	此 or 字。在聯字内俱念傲[au]尔単用仍念窩[uo]尔。
第四字頭 (V+n)	on 温	此 on 字。在聯字内俱念惡[ɤ]印切。単用仍念温[uən]。
第五字頭 (V+ng)	ong 翁	此 ong 字。在聯字内俱念惡[ɤ]硬切。単用仍念翁[uəŋ]。
第六字頭 (V+k)	ok 窩珂	此 ok 字。在聯字内俱念傲[au]珂。単用仍。念窩[uo]珂。
第七字頭 (V+s)	os 窩思	此 os 字。在聯字内俱念傲[au]思。単用仍念窩[uo]思。
第八字頭 (V+t)	ot 窩忒	此 ot 字。在聯字内俱念傲[au]忒。単用仍念窩[uo]忒。
第九字頭 (V+b)	ob 窩鋪	…付記無し…
第十字頭 (V+o)	oo 窩幽切	此 oo 字。在聯字単字内俱念傲[au]。
第十一字頭 (V+l)	ol 窩擻	此 ol 字。在聯字。内俱念傲[au]擻単用仍念窩[uo]擻。
第十二字頭 (V+m)	om 窩模	此 om 字。在聯字内俱念傲[au]模。単用仍念窩[uo]模。

中村：池上氏の理解については後で聞くとして、これらの挙例から、二つの特徴を見て取ることができそうですね。

①この付記のある見出しの音節は全て母音文字 o で始まる。

②次に示すように、単用すなわち単字 o を単独で用いる場合、合口介音 [u] が想定される。

o 窩、ū 窩、or 窩尔、ok 窩珂、os 窩思、ot 窩忒、ol 窩擻、om 窩模の付記は次のとおり。

聯字内：傲[au]—単用：窩[uo]

oi 威の付記は次のとおり。

聯字内：惡[ɤ]意切—単用：威[uei]

on 温の付記は次のとおり。

聯字内：惡[ɤ]印切—単用：温[uən]

ong 翁の付記は次のとおり。

聯字内：惡[ɤ]硬切—単用：翁[uəŋ]

吉池：①については、単用で“はだかの母音 o”で始まるものだけに付記があるということ  
で、②については、聯字内では、傲[au]や、反切の悪[x]意切や悪[x]印切や悪[x]硬切を付  
して合口介音 [-u-] を避けていることから見て、付記における“単用の窩、威、温、翁”  
は、二重母音 [uo] を意図していた可能性があるということですね。

中村：そういうことでしょうか。これらの付記に対する池上氏の見解はどのようなものでし  
ょう。

吉池：池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」は、これらの挙例に対して、次のように述べます。  
長い引用となりますが肝心の所なので、そのまま引用します。

「これを要約すると、o, or, ok, os, ot, ol, om の単字は、単独の場合にはその o は wo と読む  
が、聯字の一部分を成してゐる場合には、その o は au と読まれる。oi, on, ong の単字は、  
単独の場合には wei, wēn, wěng と読むが、聯字の一部分を成してゐる場合には ěi, ěn, ěng と読  
む。oo はいづれの場合も au と読むのである。

付記の意図は、恐らく語頭の o が現代北京語における様な二重母音 wo でないことを示す  
ことにあつたらう。その表す母音は明瞭でないが、[o] またはその近似音を表すのではな  
いかと考へる。oo についての付記には他の問題もあり、なほ明らかでない。そして単字の o  
に窩を当てた事情は、満洲語の母音字 a, e, i, u にそれぞれ現代北京語でおのおの異なる  
母音である阿, 惡, 衣, 屋を当てた結果、o (及び u) にはさらに異なる母音である窩を当てた  
ものと想像される。従つて、窩は単に十二字頭における o の単字名にすぎないのではないかと  
考へられる。oi, on, ong 及び o が他の子音文字に結合した単字についても、同じ事情にあ  
ると考へる。一学三貫清文鑑の十二字頭では、単字 a, e, i, u に阿, 厄, 衣, 屋を当て、o 及び  
u には窩を当ててゐるが、御製増訂清文鑑の十二字頭においては、a, e, i, u に阿, 額, 伊, 烏を  
当て、さらに o, u に対しても鄂, 諤を当ててゐる。額, 鄂, 諤の現代北京音は、それぞれ ê<sup>2</sup> ;  
ê<sup>4</sup>, ao<sup>4</sup>; ê<sup>4</sup> である。これは各単字の音を一層忠実に表さうとする意図によるものとみられる。  
すなはち、各単字の相違は異なる漢字によつて示すが、必ずしも満洲語の各母音にシナ語のそ  
れぞれ異なる母音を当ててはみないとみられる」(128-129 頁)。

中村：上の記述は慎重な表現により断定を避けていますが、敢えてまとめると下記の二点に  
なりそうです。

- ア. 語頭の o は二重母音 wo ではなく、[o] またはその近似音であった。
- イ. 単字 o に付された窩は、十二字頭における o の単字名にすぎない。

吉池：池上氏は、この後さらに、ザハロフ(1879)<sup>14</sup>の当時の満洲語に対する観察を紹介し

---

<sup>14</sup> И.Захаровъ, Грамматика маньчжурскаго языка, Санкт-Петербургъ 1897.

ます。

「シナ化した北京の満洲人は、特に語頭において、oの文字を正しく発音することができな  
いで、それゆゑに北方シナ語方言に合はせて во(wo)と発音する。例へば onggolo は онголо  
の代りに воньоло(wonggolo)と、oihori は ойхори の代りに войхори(woyhor)と、これから  
満洲語において foihori фойхори といふその同じ単語の別の表記も現れた。…【以下省略：  
対談者注】…」 (130 頁)

このザハロフ(1879)の記述に対して、池上氏は次のように述べます。

「前節に述べた十二字頭の条の付記は、この記述の前半にみえるシナ化した特殊な満洲語  
における発音に対する注意ともみられる。なほ foihori についての説明は検討を要する。」  
(130 頁)

中村：文字o(及びu)の「シナ化した特殊な満洲語における発音」として[uo]があるけ  
れども、正しい満洲語としては傲([o] またはその近似音)と発音すべきであるという学  
習者への注意として付記を読むわけですね。傲[au]を、円唇母音の[o] またはその近似  
音と理解するようですが。それは何に依拠しているのでしょうか。

吉池：特段の説明はありません。ただし、文字oに傲を付す十二字頭があるので次に紹介し  
ます。

#### 四種の十二字頭：漢字音注「傲」

吉池：『滿漢字清文啓蒙』(1730年題)の十二字頭と、時代的に前後する四種の十二字頭<sup>15</sup>を並べると次のとおりです。

(明)張自烈(清)廖文英『正字通』の巻首に付された(清)廖綸璣撰「十二字頭」<sup>16</sup>、  
『滿漢字清文啓蒙』の原本の系統とみられる所謂第Ⅰ類の版本(1730)、その後の増補版と  
みられる第Ⅱ類の版本(年次の詳細は不明)、『御製増訂清文鑑』(1771)の四種によります。  
なお服部四郎(1937)「一資料」を参考のために左端に付します。

服部四郎 「十二字頭引」 『滿漢字清文啓蒙』 『御製増訂清文鑑』

---

<sup>15</sup> 清・沈啓亮『清書指南』(1682年)の巻首に十二字頭がある。漢字による注音が付されて  
いないのでここでは取り上げない。

<sup>16</sup> 『正字通』影印、北京：中国工人出版社、1996年。巻頭に、漢文による「十二字頭引」  
があり「康熙九年庚戌孟冬朔旦正黄旗教習廖綸璣撰」とする。ついで満文の「十二字頭」が  
ある。

(1937)	(1670)	(1730)		(1771)
		I 類	II 類	
[ɑ]	a	阿[a]	阿昂[ɑŋ]呀[ia]切	阿[a]
[ə]	e	厄[ɣ]	惡[ɣ]	額[ɣ]
[i]	i	衣[i]	衣[i]	伊[i]
[ò]	o	敖[au]	窩[uo]	鄂[ɣ]
[u]	u	屋[u]	屋[u]	烏[u]
[ò]	ū	物[u]	窩[uo]	諤[ɣ]
[na]	na	納[na]	那[naŋ]呀[ia]切	納[na]阿[a]
[nə]	ne	訥[nɣ]	諾能[nəŋ]哦[ɣ]切	納[na]阿[ɣ]
[ni]	ni	你[ni]	呢[ni]	尼[ni]伊[i]
[nò]	no	諾[nuo]	挪奴[nu]窩[uo]切	難[nan]鄂[ɣ]
[nu]	nu	奴[nu]	奴濃[nuŋ]屋[u]切	努[nu]烏[u]
[nò]	nū	怒[nu]	挪奴[nu]窩[uo]切	懦[nuo]諤[ɣ]

中村：「十二字頭」（1730年）と、それ以降の三種とを比べると、漢字注記の体系そのものが異なります。「十二字頭」（1730年）は、見出しの文字 u と ū を同音としますが、o とは同音ではありません。即ち、 $u = \bar{u} \neq o$  です。それに対して他の三種は、 $u \neq \bar{u} = o$  です。

吉池： $u = \bar{u} \neq o$  と  $u \neq \bar{u} = o$  の違いが何を意味するか、「十二字頭」（1730年）の前後の資料を集めて検討する必要があるようです。今は資料の準備がないので、この点については後の課題とします。

今われわれが問題としている o と ū の漢字注記が興味深い。e とともに並べて確認すると次のとおりです。

服部四郎	「十二字頭引」	『滿漢字清文啓蒙』	『御製增訂清文鑑』	
(1937)	(1670)	(1730)	(1771)	
		I 類	II 類	
[ə]	e	厄[ɣ]	惡[ɣ]	額[ɣ]
[ò]	o	敖[au]	窩[uo]	鄂[ɣ]
[ò]	ū	物[u]	窩[uo]	諤[ɣ]

中村：このような様々な漢字音注が施されるのは、現代北京語と同様に、当時の北京語にも、[o] もしくは [ɔ] で始まる音節が無かったためでしょう。それぞれの文献の著者が、満文 o を表記するための近似音として敖[au]、窩[uo]、鄂[ɣ]を利用した。これ等のうち、満文 o を敖[au]（号韻の字）で表記するのは、やや変わっています。

### 満文 o に号韻字を付す先例

吉池：北京以外を見ると、傲や奥などの号韻の字を円唇母音とする地方は少なくありません。北京の近くには済南があります。[p-] を前置しますが、[pɔ] のように広目の円唇母音 [ɔ] となります。南の地域には、南京 [ɔo]、揚州 [ɔ]、広州 [ou]、陽江 [ou]、厦門 [o]、潮州 [o]、福州 [ɔ] など円唇母音は少なくありません<sup>17</sup>。古屋昭弘(2009)<sup>18</sup>によると、「十二字頭」(1730)の著者である廖綸璣は、廖文英と同じく広州府連州出身で、廖文英の子であった可能性が高いとのこと。そうであるならば、敖[au]を満文 o に当てたのは、北京語に適当な音が無かったため、南方の読書音を利用したのかもしれませんが<sup>19</sup>。

中村：済南の方言でも号韻字の母音部分が [ɔ] となるとすると、必ずしも南方の読書音を持ち出さなくても良いかもしれません。

いずれにしても、『満漢字清文啓蒙』第 I 類 (1730) の付記「此 o 字在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」において、満文 o に「傲」を当てたことには、「十二字頭」(1670) という先例が有ったわけですね。

吉池：これで、付記「此 o 字在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」の前半部分「此 o 字在聯字内俱念傲。」を“文字 o は、単語において全て傲(仮に [o] としておく)と発音する”と理解して良いこととなります。付記の前半部分はこれで良いとして、問題は後半部分です。

中村：池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」は、「単字 o に付された窩は、十二字頭における o の単字名にすぎない。」としますね。

吉池：「単字名にすぎない」が何を意味するか、私はいま一つ呑み込めません。見出しの単字に付される窩の漢字音 [uo] は、文字 o の近似音であり、二重母音 [uo] は意図しておらず、[o] (今は母音の広さの程度は問わない) を意図していたはずで

中村：「単用仍念窩。」を、すなおに読むならば、“単用(単字 o を単独で用いる)する場

---

<sup>17</sup> 南京は李榮主編(1995)『南京方言詞典』南京：江蘇教育出版社による。それ以外は前掲の『漢語方音字彙 第二版』(1989)による。

<sup>18</sup> 古屋昭弘(2009)『張自烈『正字通』字音研究』東京：好文出版の「5. 「十二字頭」等について」(18-20 頁)を参照。

<sup>19</sup> もっとも、「十二字頭」(1670)の第一字頭の初頭に「此音是以下十一韻之母讀者必詳記諸漢字皆係京韻」(此の音【第一字頭：対談者注】は以下十一韻【11 の字頭：対談者注】の母。読む者は詳らかに記憶せよ。漢字はみな京韻である。)とある。著者は「京韻」(北京の音か)を意図しているが、意図に合わない漢字音も利用せざるを得なかったということになる。

合、元のまま窩と発音する”となりますから、「o 窩[uo] oke 嬌子。此o字在聯字内俱念傲。單用仍念窩。」の付記を素直に読むならば、“文字oは單語において全て傲[o]と発音し、單用（單字oを單獨で用いる）する場合、元のとおり窩[o]と発音する”となり、意味が通りません。

吉池：やや強引な解釈ですが、“文字oは單語において全て傲[o]と発音するが、單用（單字oを單獨で用いる）する場合は、しばしば窩[uo]と発音される”と読むしかない。

中村：見出しの單字に付された「窩」（[o]を意図する）と、付記の單用の「窩」（[uo]を意図する）の音を、異なるものとして理解するわけですね。

吉池：そのように理解するならば、どうにか付記全体の意味はとおりそうです。

中村：吉池さんのように理解すると、付記の漢文自体の意味からは少々離れますが、文字oは單用（單字oを單獨で用いる）する場合は、しばしば窩[uo]と発音されるけれども、單語においては文字oは窩[uo]ではなく、傲（[o]）と発音せよ、との学習者に対する注意と理解するということですね。これは、池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」と同様です。

吉池：この点について、『滿漢字清文啓蒙』(1730)の第I類と第II類を比べてみると、なかなか興味深いものとなっています。

#### 第I類(1730)

「o 窩[uo] oke 嬌子。此o字在聯字内俱念傲[au]。單用仍念窩[uo]。」

「ū 窩[uo] ūren 塑像。此ū字在聯字内俱念傲。單用仍念窩[uo]。」

#### 第II類(その後の刊行。おそらく乾隆年間)

「o 鄂[x] oke 嬌子。此o字在聯字内俱念傲[au]。單用仍念窩[uo]。」

「ū 諤[x] ūren 塑像。此ū字在聯字内俱念傲[au]。單用仍念窩[uo]。」

中村：第I類は見出しの單字に付された窩[uo]（[o]を意図する）と、付記の單用の窩[uo]（[uo]を意図する）とは漢字表記が衝突するけれども、第II類は見出しの單字に付された鄂[x]（[o]を意図する）と、付記の單用の窩[uo]（[uo]を意図する）とは漢字表記の衝突はない。

吉池：第II類の付記の窩をどのように理解するか問題ではあります。第I類の付記の窩がたまたま残ったのか、それとも鄂[x]と窩[uo]の違いを意図したものか、そのいずれかであるかは判断できないけれども、結果として漢字表記の鄂[x]と窩[uo]は重なることなく、都合よくまとまっています。

いずれにしても、これまでの議論に拠る限り、この付記を「文字 o は単用（単字 o を単独で用いる）する場合、しばしば窩[uo]と発音されるけれども、単語においては [uo] ではなく傲 [o] と発音せよ」という注意として読むことができるということですね。

中村：先のザハロフ氏は、語頭の o が二重母音 [uo] と発音される例を挙げましたが、単用（単字 o を単独で用いる）する場合の裸の o も、語頭の o も、漢人が発音する場合には、北京語に [o] もしくは [ɔ] で始まる音がなかったため、介音 [-u-] に先立たれた [uo] で、しばしば発音してしまう、その点は単用の o も、語頭の o も同様です。付記はそのことへの注意書き、ととらえておきましょう。

吉池：ザハロフ(1879)は、漢語の影響を受け語頭の o を [uo] で発音する満洲語の例を紹介したわけですが、そのザハロフ(1879)から 150 年ほど前の『滿漢字清文啓蒙』(1730)の時代に、すでに、漢語の影響を受けて裸の o（及び u）を二重母音の [uo] で発音する現象があった。

中村：この付記はスッキリと腹に落ちない漢文ですが、満洲語史にとって興味深いものでした。今回はこれまでとしましょう。次回は子音の音質などの検討ですね。